

2020 年度

博士学位論文

論文の要旨及び審査結果の要旨



人間総合科学大学大学院

人間総合科学研究科

心身健康科学専攻 博士後期課程

令和2年度博士学位論文の要旨

氏名	山野内 靖子		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 46 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 21 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	小児慢性疾患を抱える若年者の小児期体験が心身に及ぼす影響		
研究指導教員	教授 庄子 和夫		
論文審査委員	主査 小岩 信義	副査 中山 和久	鍵谷 方子 吉田 浩子

【目的】小児慢性疾患を抱える若年者(以下、若年者)の小児期体験が心身に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】対象は、小児慢性疾患患者の若年者 24 名と健常大学生 260 名であった。調査は最も印象に残っている小児期体験の自由記述とその体験年齢、13 項目 5 件法版 SOC 評価スケール、S-H 式レジリエンス検査、健康関連 QOL SF-8 を留め置きによる無記名自記式で回答することで行われた。身体的健康の体の痛みと精神的健康を目的変数とし、小児期体験の内容や疾患の有無、SOC とレジリエンスを説明変数とする重回帰分析を行った。

【結果】小児期体験の内容は、活動体験と心身の痛み体験に分類された。若年者の小児期体験の年齢は 11 歳前後であり、発症年齢と有意に相関した。SOC 得点は若年者と健常大学生の間で有意な差はみられなかったが、レジリエンス得点は健常大学生より若年者が有意に低かった。

重回帰分析の結果、小児期の活動体験と小児慢性疾患の有無は直接的に体の痛みに正の影響を与え、その体の痛みは精神的健康に正の影響を与えていた。レジリエンスは小児慢性疾患の有無から負の影響を受け、心身の痛み体験から負の影響を受けた。そのレジリエンスは精神的健康に正の影響を与えていた。

【考察】小児期の活動体験と小児慢性疾患の有無は体の痛みに影響を与え、体の痛みは精神的健康に影響を与えることから、小児慢性疾患を抱える若年者は活動体験を得ることが心身の健康を保つ上で重要であると考えられる。加えて小児慢性疾患の有無はレジリエンスを通して精神的健康に影響を与えるが、心身の痛み体験を少なくすることが精神的健康を保つのに重要と考えられる。

【結語】小児慢性疾患を抱える若年者は、小児期活動体験とともに体の痛みを通して精神的健康に影響を与えていた。さらに小児慢性疾患は、レジリエンスを低下させる要因であるが心身の痛み体験からの影響を軽減することが精神的健康を保つことにつながる。

倫理審査承認番号

八戸赤十字病院研究倫理審査 No. 2013-5, 青森労災病院医学研究倫理審査 No. 17, 湊病院研究倫理審査 2014-7, 八戸学院大学倫理審査 No13-11, 人間総合科学大学倫理審査第 387 号

【Keywords】小児慢性疾患, 若年者, レジリエンス, ストレス対処力, 心身相関

博士学位論文審査結果の要旨

本研究は、小児慢性疾患を持つ若年者と健常大学生を対象に行った調査結果を基に、小児期の最も印象に残る思い出体験とストレス適応力、健康度の関連性を明らかにしている。精神的な回復力やストレス適応力として近年注目されている「レジリエンス」や「首尾一貫感覚 (sense of coherence, SOC)」に着目し、両者の関係性や概念を整理したうえで適切な質問紙をつかって心理的側面の評価を実施するとともに、健康関連 QOL 指標によって身体的及び先進的の両面から健康度を評価し、仮設モデルを統計的手法によって検証した。

2020 年 10 月 30 日に実施された口頭試問における論文内容の発表ならびに質疑応答の中で分析の手法並びに視点に関する疑問が提示されたため、論文審査委員から追加となる質問を申請者に行った。申請者からは各質問への回答がなされ、審査委員によって論文の妥当性を確認した。口頭試問、追加質問をとおして本論文に関する専門知識と関連する能力を有すると判断された。以上のことから審査委員の全会一致で申請者が博士 (心身健康科学) の学位を授与するに値すると判断した。

掲載雑誌：『心身健康科学』(第 18 巻 1 号)

令和2年度博士学位論文の要旨

氏名	野田 みや子		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 47 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 21 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	マタニティ・ヨーガが妊産褥婦に及ぼす影響 ～心身健康科学の視点から～		
研究指導教員	教授 庄子 和夫		
論文審査委員	主査 藤原 宏子	副査 中山 和久	矢島 孔明 鮫島 有里

【目的】マタニティ・ヨーガを実践した妊産褥婦を対象として、妊娠、産褥の各期における心身の状態を調査し、マタニティ・ヨーガが妊産褥婦の心身の健康に及ぼす影響を、主に抑うつ感の変化に着目しながら科学的に明らかにする。

【方法】2012年3月～2015年に、A県の産科3施設で出産の妊婦に対し、妊娠3ヶ月から産後3ヶ月にかけて5回の自記式質問紙調査と、妊娠中期から後期にかけて5回のクラス介入をした。データの分析は統計解析ソフトSPSS Statistics21、およびエクセル統計、Excel共分散構造分析Ver.2にて実施した。

【結果】不快症状得点は、産後3ヶ月ではヨーガ群が有意に低くなっていた。EPDS得点は、妊娠3ヶ月の全体平均は6.5点であったが、9点以上の高得点者は36.9%で、そのうちの6割以上がヨーガ群に属しており、高得点者の多くがマタニティ・ヨーガを選択していた。産後3ヶ月では、ヨーガ群とピクス群が有意に低くなっていた。CSES得点は、妊娠3ヶ月では産後4日ではヨーガ群が有意に高くなっていた。MIBS-J得点は、産後3ヶ月では、ヨーガ群が有意に低くなっていた。またパス仮説モデル検討の結果、マタニティ・ヨーガ選択から「体重変化率」へのパス係数が-0.95、「体重変化率」と「分娩時間」、「分娩様式」との相関係数が0.89、0.83と高く、「褥婦の特性」から「産後3ヶ月不快症状」「MIBS-J」へのパス係数が-0.99、-0.98と高値であり、モデルとデータの適合度が高いモデルになった。

【考察】ヨーガを選択した妊婦の心身の特性は、既往歴、不快症状等の身体的特性が、心理的特性の抑うつ感を高め、出産への不安を増強させたとの解釈と、不快症状軽減を期待してヨーガを選択した可能性も否定できない。また抑うつ感低減と自己効力感増加は、互いに良い影響を与え合っていたと考えられ、妊婦の自己効力感を向上の機序の中で不快症状の低減と抑うつ感の減少が重要な前提条件になっていることが推測できる。また、妊娠中の体重増加の抑制から分娩時間短縮、緊急帝王切開抑制がアプガースコアを向上させたと考えられる。パス図から、ヨーガによって不快症状が半減し、それが児への否定的感情を減少させ、母乳栄養確立を高めるとともに抑うつ感を減少させたという機序が想定できる。

【結論】妊産褥婦の心身の健康の向上には、妊娠に伴う不快症状を減少させ、抑うつ感を低減させることが重要であり、マタニティ・ヨーガ等の不快症状を軽減させる介入が有効であることが示唆された。

倫理審査申請承認機関:人間総合科学大学大学院(第 295 号),社会医療法人宏潤会(2012-3)

【Keywords】:マタニティ・ヨーガ、妊娠に伴う不快症状、抑うつ感、自己効力感、児への思い

博士学位論文審査結果の要旨

本論文は、妊娠期にマタニティ・ヨーガを実践した対象者の心身の状態を妊娠期から出産後まで継続して調査し、共分散構造分析により解析した結果として新たな知見を示している。主要な結果として、妊娠期にみられる抑うつ感の減少及び自己効力感の向上が身体の状態と関連していることが明らかにされた。これまでに、マタニティ・ヨーガが抑うつ感を改善し、自己効力感を高めることが知られていたが、これらの効果が生じる機序の理解は不十分であった。本論文は、マタニティ・ヨーガの効果として知られている心理的変化が身体の状態変化と関連していることを示し、心身健康科学に新たな知見を提供したといえる。申請者は対象者から得られた膨大なデータを解析する粘り強さを持ち、今後自立して心身健康科学の研究を行うことができると判断された。以上のことから申請者に博士(心身健康科学)の学位を授与する価値があるものと判断した。

掲載雑誌:『心身健康科学』(掲載予定)

